

Title	東亞經濟研究(第六卷)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.2 (1923. 2) ,p.132(292)- 134(294)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大正十一年度雑誌主要論文 書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230200-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

義隆は當代の第一人者たる神道の達人吉田兼右を周防に招き種々なる神道行事を授かり、又之に質問する所あつた。その問答の文書によれば、彼が顯幽兩界に可なりの深い智識を具備し、煩瑣なる事相の詮索にまで没頭してゐたことが知られる。

中央史壇 (第四卷、五卷)

奥州に残つた蝦夷の殘藁 (四、二、二七七)

金田 一京助

鎌倉期以降全く中央の史籍にその消息が絶えた蝦夷の話を様々な文献から拾ひ集め、往古の蝦夷が北海道アイヌと同一のものなることを立證してゐる。

紋章の形成 (四、二、二九六)

沼田 頼輔

紋章の分類 (四、三、三七九)

同

紋章の地方的分布 (五、三、三六四)

同

紋章學者たる氏の蘊蓄を示す有益な論文である。

幕府と佐藤信淵 (四、五、一二三九) 幸田 成友

佐藤信淵は講談所普請の件に坐して江戸拂を命ぜられてゐた。天保改革の際幕府は信淵の上書を嘉して之を徵さんとしたが、鳥居甲斐守が反對して沙汰止となつた。著者は市中取締類中の書類中の資料によつてその事情を詳述してゐる。

備慈多道留 (四、五、一二三七) 伊木 壽一

相良家所藏文書中 備慈多道留よりの書面がある。備慈多道留

とはホルトガル語の *Visitator* 即ちゼスイツト教の一職名で特命監察官とも譯すべきものである。日本に渡來せる宣教師中 *Visitator* たりしは *Alexandro Valignani* 一人であるから、此書狀は彼によつて天正八年有馬天草あたりから相良義陽にあてゝ出されたものであらう。

「衣川の役」の義經 (五、一、九二) 金田一京助

我國の義經蝦夷落傳説は蝦夷地に於ける義經傳説の輸入により寛文頃から起つた、蝦夷地に於ける義經傳説は古くに渡つた御曹司島渡傳説の痕跡と、地名俗解の要素とアイヌ神話の英雄を義經と同一視した要素との三要素から成立つてゐる。何れにしても民衆の思慕愛惜から生れた英雄不死傳説の一例である。

阿只拔都 (五、一、二〇七) 後藤 肅堂

高麗末期に於ける倭寇の大將少年阿只拔都の奮闘並びにその戦死を朝鮮文籍を通じて叙述してゐる。

親鸞聖人と教行信證 (五、六、八三一)

本多辰次郎

喜田博士の教行信證偽作説を駁し、我國撰述の佛書中の寇覓とも云ふべき本書が、博士の云ふ如く備はれ學者の手によつて成りしとは到底信ぜられず、博士の擧げた疑問は基礎極めて薄弱なることを逐一に論じてゐる。

東亞經濟研究 (第六卷)

禹貢製作の時代 (六、一、二) 内藤虎次郎

禹貢を編成した材料は古書の中で禹貢特有のものとして云ふことが出来ないのみならず、必ずしも他の材料が禹貢よりも新しいと云ふ事も出来ない。禹貢が早く存在して居たが爲に地理學に關する他の記載が皆之を模倣したと斷ずることは出来ない。その類似し共通した他の材料は多くは戰國時代のものである。禹貢の中に時として戰國時代よりも古い材料を多少含んでゐるとしてもその組み立てた時代並びにその中に含んでゐる多くの材料は戰國以前に之を上げることは難い。

鐵道に關する智識の支那を通じて我國に

傳はりし場合に就て (六、一、一一二)

武藤 長藏

西洋人によつて支那に於て出版された假邇貫珍、智環啓蒙、地球説略、中外新報等に鐵道に關する記事あり、之によつて鐵道に關する智識が幾分我國に傳はつた。

明代の皇莊 (六、二、一二五)

清水 泰次

皇室の窮乏並びにその繁榮に伴ひ、天子が私田即ち皇莊をおいて民と利を争ふ様になつた。その起源は天順八年の憲宗の治世でその數は三六箇所、設け初めの史料が實録に採録されてゐないのは天子も史官も正常な行動になつたものと信じなかつたので抹殺したのであらう。かく不純な動機から生れたものだから以來民を苦しめる源となつた。しかも宦官奸民の狡猾は此弊を益々大ならしめたのである。

葡萄牙人支那渡來顛末 (六、二、一六八、六、三、三七)

二、六、四、四九九

矢野 仁一

葡萄牙人の廣東驅逐後廣東の外國貿易が一時廢絶し、其後復興するに至つても、葡萄牙人は獨り之に加はることを許されなかつた。(以上第六章)

明初市舶司を太倉黃渡に設け、ついで福建、浙江、廣東に改めた。浙江の市舶司は嘉靖二年大内氏と細川氏の使及び宋素卿が相讐殺し、ために夏言人の上奏となつて廢止された。福建も廢されるに至つたかどうか疑問であるが廣東市舶司だけは廢されなかつたやうである(以上第七章)

葡萄牙人が廣東に於て通商が出来なくなつてから寧波附近のリアンポに殖民地を設けた。一五四二年頃に其殖民地の存在してゐたことは確かであるが、其以上のことは不明である。支那史籍にリアンポのことは出てないが嘉靖十九年に、李光顯等が葡萄牙人を誘引して雙嶼に據つたと見ゆる。此雙嶼はピントの紀行に見ゆるリアンポから三リトグの距離にあるリアンポの港と稱せられた二つの對峙した島なるものを指してゐるのではなからうか。

リアンポの葡萄牙人殖民地は寧波府とも又リアムポの港と稱せられた島からも隔つて居た様で、その廢絶は雙嶼の攻落されたる年即ち一五四八年であつたらしい。(以上第八章)

錢莊の發達に就て (六、四、四三七)

及川 恒忠

宋の夢梁錄に見ゆる金銀鹽鈔引交易舖をもつて錢莊の源流なりとし、次いで近代に於ける錢莊の發達變遷に就て叙述してをる。

預備倉と濟農倉 (六、四、四五六) 清水 泰次

明の救荒倉庫たる預備倉の創立年代は定まつてゐない。其組織は半官半民であり、人民は入用の時米を借り出し、不用になつたら無利子で返せばよい。一縣四倉で全國に徹底的に設置された。此制度の崩壞に伴ふて濟農倉が作られた。その創立年代は矢張り不確かであるが宣徳七年に出來て八年に之に關する立派な規約が出來たのであらう。

支那史料に現はれたる日本最古の經濟生活

(六、四、四七五) 橋本 増吉

倭人に關する支那記録の最古のものは山海經の記事であつて同書は武帝時代を溯ること大ならざる時代の編纂である。その他の漢代の記録によつて判ずると我國古代交通路は主として北方の航路によつてをる。しかし南方への交通も暗示せられるのである。魏志倭人傳によれば、當時農業が我國人の主要産業であり、その傍ら麻糸絹糸の紡績も行はれ、木綿の使用も知つてゐたらしい。蠶桑芋麻が支那方面より傳來せられたるに對し、禾稻木綿は南方アツアより直接傳來したのではなからうか。多少の手工業も農業の傍ら餘力を以て行はれ、商業も貿易も定時開場の市に於て官吏監視の下に行はれた。當時の我國の状態は自給的經濟生活の時代を經過して交通經濟時代の第一期に入りしものである。それ以前の原始經濟生活は漁撈に依頼し、傍ら狩獵に従事したものであらう。

民族と歴史 (第七卷、第八卷)

「民族の歴史」の論壇は喜田博士の獨舞臺である。博士の議論に全部賛同することは出來ないが、其精力には感嘆に堪へぬ、又此雜誌が民間傳承の採集に骨折つて呉れるのは他にさういふ雜誌のない今日誠に感謝すべきである。「土の鈴」「郷土趣味」などの類雜誌があるけれど本書が最も普及してをるやうである。然しそれも本年からは「社會史研究」と改題されて多少態度が改まるやうである。まさか時流を追はれたわけではなからうが日本の民族史研究者にとつては残念なことである。

長者考概説 (七、一、一)

喜田 貞吉

或團體に長たる者を長者と號し、後に必ずしも其長たらぬものにまで其語が及ぶ様になつた。然るに後にそれが廢語となり、長者が富豪のみを意味する様になり。富豪ならぬ者の長者に就いてもそれが大富豪であつた如く考へられて種々の長者傳説がそれに附會せられるに至つたものらしい。

妹背島 (七、三、二五三及び七、四、三四二)

喜田 貞吉

今昔物語の妹背島の説話に因み、古代皇室に於て血族結婚の行はれし事實を述べ。